

「いえでででんしゃ」 あさのあつこ 新日本出版社 ＜あさ・日本＞ ある日、「ムジツノツミ」でママにしかられた さくら子は、リュックサックにきがえやお年玉の のこりなどをつめて、家出した。夕方のえきに やってきたのは、ボロいでんしゃ。 このでんしゃは、家出した子どもだけが乗ること のできる「いえでででんしゃ」。となりのクラスの けいすけくんといっしょにのったさくら子は…。	本の森 ＜小学3・4年生編＞ 〔※ホームページ版では、表紙画像を掲載していません。〕 香芝市民図書館 H30. 05	「ふしぎな木の実の調理法」 岡田淳 理論社 ＜おか・日本＞ 見わたすかぎり、雪・雪・雪。その中をゆうびんはいた つのドーモさんは、にもつをはこんでいました。あて先 は、こそあどの森に住むスキッパーのところです。 さて、スキッパーのもとにおくられてきたにもつをあけ ると、中には木の実と手紙がはいっていました。けれど も、ちょうど木の実のりょうりのしかたのかかれていると ころが雪でぬれてしまって読めません…。	「魔女の宅急便」 角野栄子 福音館書店 ＜かど・日本＞ キキはふつうの人のオキノさんと魔女コキリさん の娘です。キキのような人と魔女の娘は、10才に なると、どのように生きていくかを自分で決めること ができます。魔女になる決心をすると、お母さんから 魔法を教わり、13才の年の満月の夜をえらび、 ひとり立ちします。キキも魔女になる決心をして、コ キリさんから魔法を習いました。 そして、出発の日をむかえますが…。
「千年ぎつねの 春夏コレクション」 斉藤洋 佼成出版社 ＜さい・日本＞ 山のとっぺんの2本のイチョウの木にハン モックをかけて、ひるね中のきつねがいます。 このきつねはなんと1000年も生きている千年 ぎつねです。ふだんは何もしません。ただねて いるだけです。でも、ときどきみんなをあつとい わせることをします。 5月5日、子どもの日のこと。千年ぎつねがね ていると、林の中から「日本一」のはたをさして カメにまたがった金太郎があらわれて…。	「^{めいかいでんせつ}冥界伝説 ^{い ど}たかむらの井戸」 たつみや章 あかね書房 ＜たつ・日本＞ ぼく高村悟は小学3年生。夏休みには毎年、京都のおばあ ちゃんの家で家族で過ごします。おばあちゃんの家はおも や、はなれ、にわ、ととても広いのですが、にわの井戸には ある伝説があることを悟は初めて知ります。 お父さんの話では、なんでも平安時代の昔の役人「おの のたかむら」が冥界の役所へ通っていた井戸のひとつだと いいます。話をきいた悟は、ないしょで井戸の中をさぐるこ とに。すると…。	「^{たんていきょく}ムジナ探偵局 1 ^{めいたんてい とうじょう}名探偵登場！」 富安陽子 童心社 ＜とみ・日本＞ へんてこ横丁にあるムジナ探偵局にまいこむのは、へ んてこな事けんばかり。 この日も、ムジナ探偵と源太がしょうぎをさしています と、コートをきた女の人が入ってきました。この女の人 のいらいは「あるところで、ゆめで見たものと同じ白い木 のはこを見かけたのですが、そのはこに何が入っているか 見えてほしい。」というものでしたが…。	「みしのたかくかにと」 松岡享子 こぐま社 ＜まつ・日本＞ ふとっちょおばさんはある日、台所でたねを見つけ ました。さっそくおにわにたねをまいていますと、とお りかかりの男の人は、あさがおのたねだと言い、女 の人はすいかのたねだろうと言いました。 そこで、おばさんは「あさがおかかもしれない、すい かかもしれない、とにかくたのしみ」と板に書いて立 てました。 それをさんぽ中の王子さまが、はんたいによんで しまつて…。
「かめきちのなくな！王子様」 村上しい子 岩崎書店 ＜むら・日本＞ クラスたいこうリレーで一等賞をとったときの トロフィーが教室からなくなってしまいました。 先生もトロフィーがいつなくなったのか、分かり ません。このトロフィーには、あるおそろしい わさがつたわっていました。そんなとき、かめき ちの大すきなけい子ちゃんから「うちにきてほ しい」とでんわがあり、いそいでけい子ちゃんのと ころへ行ってみると…。	「なんでもただ会社」 ニコル・ド・イルシング 日本標準 ＜イル・外国＞ 水曜日の午後、ティエリーはお兄ちゃんとふたりきりでお るすばん。お兄ちゃんはいしゅくだいでいそがしいし、たいくつな ティエリーは、お母さんにとめられている「電話」であそぶこ とにしました。自分のたんじょうび「19991025」にかけて みると、つながったのです！つながった先は、「なんでもた だ会社」。電話で注文すると、なんでも「ただ」でくれます。た だし、「ん」でおわるものはぜったいに注文してはいけないと 言いますが…。	「火曜日のごちそうはひきがえる」 ラッセル・E. エリクソン 評論社 ＜エリ・外国＞ ウォートンとモートンはヒキガエル兄弟。冬のある日、 ウォートンは、モートンが作った「かぶとむしのさとうがし」を トゥーリアおばさんに持って行くことにしました。モートンのし んぱいをよそに、ウォートンは、セーターに上着をたくさん着 て、手ぶくろに、ぼうしをかぶって出かけていきました。 ウォートンが雪の上をスキーですべっていくと、黒いかげが。 見上げると、ミミズクが大きなたばさを広げてまいおりてきま した。上ばかりを見ていたウォートンの目の前には…。	「がんばれヘンリーくん」 ベバリイ・クリアリー 学研 ＜クリ・外国＞ ヘンリーくんは3年生。ある日、町であばらば ねがすけて見えるほどやせた犬を見つけまし た。ヘンリーくんはさっそく、この犬に“アバ ラー”と名まえをつけ、バスにのせて、家につれ てかえろうとします。でも、アバラーをつれてバ スにのろうとすると、うんでん手から「ダメ」と言 われてしまいます。そこで…。

「オシリカミカミをさがせ！」 リンデルト・クロムハウト 朔北社 ＜クロ・外国＞ トイレにすわるとガブリ！！ブルームさんもヤニーさんもおしりをかむばけもの「オシリカミカミ」にかまれてしまいました。びょういんもトイレでおしりをかみつかれた人でいっぱい。まちはおおさわぎ。「よし、ぼくがやってみよう。オシリカミカミをさがしに行こう！」ユスはゆうきをふりしぼって、マンホールの中に入りました。そこでユスが見たものは…。	「ロボママ」 エミリー・スミス 文研出版 ＜スミ・外国＞ お母さんに向かって「母さん！母さんって、なにひとつ、まともにできないんだね！なにひとつ！」と言って、お母さんの数々の失敗をならべたてたぼく。 お母さんだって負けていませんでした。大きな会社でロボットの研究をしているお母さんは、お母さんロボット、その名もロボママを作ったのです！ さあ、ロボママとの生活がスタート！！	「ピトゥスの動物園」 サバスティア・スリバス あすなる書房 ＜スリ・外国＞ なかよし六人組の最年少ピトゥスは、町中の人気者です。そんなピトゥスがある日、むずかしい病気にかかってしまいました。病気を治すには、とても多くのお金が必要です。 そこで、なかよしの5人が集まっていいアイデアを思いつきました。それは自分たちの手で動物園を作ろうというものでした。 本当に作ることができるのでしょうか？	「大どろぼう ホッツェンプロッツ」 オトフリート・プロイスラー 偕成社 ＜プロ・外国＞ おばあさんの大せつなコーヒーひきが大どろぼうホッツェンプロッツにぬすまれてしまいました。 カスパールと友だちのゼップルは大どろぼうをつかまえて、コーヒーひきをとりもどそうとします。そこで2人は、大どろぼうのかくれ家をさぐろうと、わなにかけることにしました。ところが…。
「長くつ下のピッピ」 リンドグレーン 岩波書店 ＜リン・外国＞ ごたごた荘に住んでいるとっても魅力的な女の子ピッピが主人公の物語。ピッピは近所のトミーやアンニカと一緒に遊びます。ピッピと遊ぶといつもおもしろい出来事がたくさんついてきて、トミーやアンニカは大喜びです。読んだらあなたもピッピの大ファンになっているかもしれません。	「うしはどこでも『モ～！』」 エレン・スラスキー・ ワインスティーン 鈴木出版 ＜E ウ＞ 犬は、イギリスでは「バウワウ バウワウ」となき、スペインでは「グァウ グァウ」、フランスでは「ワウ ワウ」、日本では「ワンワン ワンワン」となきます。 同じ動物でも、それぞれの国で、なき方がちがうのですが、牛だけは「モ～」。	「せんねん まんねん」 まど・みちお 理論社 ＜E セ＞ 「いつかのっぼのヤシの木になるために」 いのちはぐるぐるとちきゅうの上をめぐるっていきます。ヤシのみが地べたにおち、その地ひびきでミミズがとびだし…、そして、いつかはのっぼのヤシの木へと…。 104才まで生きた詩人まど・みちおさんの詩を絵といっしょに楽しめる絵本。	「メアリー・スミス」 アンドレア・ユーレン 光村教育図書 ＜E メ＞ 月曜日のあさ早く、よが明けるまえにいえを出る女の人が1人。とつぜん立ち止まり、ポケットの中からとりだしたのは、しわしわでかちかちの豆！その豆をひとつぶチューブにこめると、ぷっとひとふき。カチン！パン屋のまどにみごとめいちゅう！ イギリスでみんなをおこす仕事、ノッカー・アップ（めざまし屋）をしていた女の人のお話。
ほ 「干したから…」 森枝 卓士 フレーベル館 ＜E5・知識＞ トマトを太陽の下で干すとどうなるのでしょうか？そう、しわしわになります。れんこん、りんご、しいたけ…みんな、しわしわになってしまいます。干すのは、野菜やくだものだけではなくありません。魚に肉にチーズ。日本だけでなく、世界中でいろいろなものが干されています。では、どうして、干すのでしょうか？	「イギリスとアイルランドの昔話」 石井桃子 編・訳 福音館書店 ＜388.3＞ 「むかし、あるところに三びきの子ブタがいました。あるとき、子ブタたちは、家を出ることになりました。一番目に出かけた子ブタはワラで自分の家を作りました。そこへオオカミがやってきて…。」「三びきの子ブタ」など、イギリスとアイルランドに伝わる30のお話のがのっています。	「石ころ地球のかけら」 桂 雄三 福音館書店 ＜458＞ はま辺にはいろいろな形や色の石ころがあります。石ころの旅は、山から始まります。大きな岩が、川の中へくずれ落ちます。その大きな岩が、川に流され、ぶつかりあい、われて、小さくなっていきます。小さくなり、まるくなった石ころが、川を下り、はま辺にやって来ました。そこへ、大きな波が…。 石ころの旅はまだ、つづきます。	「しっぽをなくしたイルカ」 岩 貞 るみこ 講談社 ＜489.6＞ 沖縄美ら海水族館には、母さんイルカのフジがくらしていました。そのフジをとつぜんおそった、おびれが白くなるえ死。え死をとめるため、じゅう医のうえ田さんはおびれを切りおとします。え死は止まりますが、おびれのないフジは思うようにおよげません。フジの体ちょうはわるくなるばかり。そこでうえ田さんはフジにおびれを作れないか、考えました。こうして、世界初イルカのおびれ作りが始まったのです。